ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「よく来てくれたね」

　屋敷の客室。一行はこの屋敷の主人の氏から歓迎を受けていた。

　見た目は短髪で、ややメタボな体型が目立つ感じだ。服装も、アロハシャツに短パンのジーンズとラフなものだった。高価そうなものは、何一つとして身につけてはいない。

　だが、雅也達四人は幼いながらも、一氏から出る『金持ち』のオーラ……とでも呼べばいいのだろうか？　それに圧倒されていた。白は勿論、田島辰巳も慣れているのか、全く動じていない。

「ご無沙汰しております。一さん」

「はっはっは。数日前に会ったばかりではないか。それに堅苦しいのは無しだよ、辰巳殿。さあ、そんなところに立っていないで、そこに座ってくれ」

　朗らかにそういいながら、一氏は目の前にあるソファーを手で指した。勧められるままに、雅也達五人は腰掛ける。

　すると、白と優がオレンジジュース（田島辰巳には紅茶だ）とお茶請けのビスケットを運んできた。いつの間に用意したのだろうか。

　だが、そんな疑問より、気になっていることがあった拓馬は、少し遠慮がちに口を開く。

「あの……すみません。お二人は、知り合いだったのですか？」

　何となく、そんな感じがしたのだ。

　すると、田島辰巳はニヤっと頬を上げる。

「まあな。昔の話だ――ところで一さん。『数日前に会ったばかり』と仰いましたが、たった数秒のことでしょう。あんなの、会った内に入りませんよ」

「はっはっは。すまないね。これでも色々忙しい身なんだ。まあ、今回の合宿にスケジュールを合わせて、まとまった休みをとったから、夜にでもゆっくり語り合おうじゃないか」

「ええ。楽しみにしています」

　一体二人はどういう関係なのか、気になって聞かずにはいられない雅也達だったが、それを堪えて出された飲み物に口をつける。何となく、自分たちが気軽に聞いていいような話では無い気がしたのだ。

　それにしても、実に美味しいオレンジジュースだと彼等は思った。口に広がる芳醇な香りが、何とも爽やかなオレンジの風味を醸し出している。流石は金持ち。出てくる飲み物から既に庶民とは違うものを感じる。いや、まあそれも当然だ。

　こんななりだが、嶺川一氏は嶺川コーポレーションの社長、もっと言えば嶺川財閥の総帥である。日本、いや世界屈指の財閥であり、歴史は古く、江戸時代中期から続く名家だ。なんでも、どっかの地方をまるごと治めていたんだとか。あまり知られていないことだが、実は中学校の歴史の教科書を開いて出てくる偉人の何人かは、この『嶺川』の血筋だったりする。

　現在でも『嶺川コーポレーション』といえば、普通に生活していて目にしない日は無いほど有名な企業だ。テレビをつけて流れてくるＣＭは勿論、番組のほとんどにスポンサーとして出資しているし、店に入れば売られている商品のほとんどは『嶺川コーポレーション』のマークがついており、そこで作られていることが分かる。もっと言えば、販売している店も『嶺川コーポレーション』の子会社だったりすることもザラだ。雅也や拓馬達の通う一之上学校の設立の際も、嶺川家は多額の資金を提供したと記録されている。

　他にも色々な事業に手をつけており、現在でも尚、その勢力は衰える影を見せる事はない。

「ところで一さん」

「うん。分かっているよ。もうすぐ来るはず……おや、噂をすれば」

　一さんが何かに気がついたように、部屋の入口の辺りを見つめる。すると、遠くからタッタッタという小気味よい音が近づいてくるのが、雅也達にも分かった。

　隣で拓馬と良助と奈央は頭の上に『？』マークを浮かべているが、雅也と白は誰が近づいてくるのかを察した。

　刹那、勢いよくドアが開かれる。

「パパ！　みんな来たって聞いたんだけど！」

　透き通るような、元気のいい女性の声が、部屋中に響く。黒いスポーツウェアに身を包んだ少女が入口に立っていた。

　やや紫がかった黒髪を背中の真ん中辺りにまで伸ばした、力強い声とは対照的に白い肌。パッチリとした猫目で皆を見つめるこの少女の名は嶺川。一氏の一人娘にして、今回の合宿をここでやろうと雅也に提案してきた人物である。

　いつの間にか、白が来夢音とお揃いの、こっちは青いスポーツウウェアに着替えて、彼女の少し後ろの方でまるで護衛であるかのように立っていた。最も、白は彼女の専属の執事なので強ち間違ってはいないのだが。こうして見ると、白が来夢音より後ろにいることを勘定しても、来夢音の方が白より少し背が高かった。

「こら、来夢音。もっと慎ましやかに入っては来れないのかい？　それに、せっかくのお客様を待たせるのは失礼じゃないか」

　一連の彼女の行動に呆れたように深く溜息を吐き、一氏はやれやれと首を横に振ってそう言った。

「あ、あはははは。皆、待たせちゃってごめん！　辰巳さんも申し訳ありませんでした！」

　ペロっとちょっと舌を出して、頭を片手でコツンと叩いて、来夢音は皆に頭を下げる。

　財閥の娘とは思えない、随分とフランクな対応だが、そんな彼女の様子に、雅也は少し安心感を覚える。学校でも、彼女はいつもこんな感じなのだ。クラスの明るいムードメーカーである。

「いや一さん。私達もついさっき来たばかりですし……それに彼女も気合十分な様子ですから」

「そうかい？　そう言ってもらえると助かるね」

　苦笑する田島辰巳に、頭をポリポリとかく一氏。

「それじゃ、よろしくお願いしようか。では辰巳殿。早速――」

「はい。お任せ下さい」

　こうして、彼等の合宿は始まった。